

魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

12 お前は誰だ

「なんだなんだ、朝っぱらからうるさいぞ」

バルコニーの奥から目をこすりこすり出てきたのは、王様でした。

「いったいなにを騒いでおるのだ……みんな？」

バルコニーに寄りかかってあごを突き出した王様の眉間に、しわが寄りま
す。どうやら、ニーダマの姿に気がついたようです。

「王様！ 申し訳ございません。この、くせ者めがお城の中に忍び込んだので
ございます」

ニーダマを後ろ手にひねり上げた兵隊がしらが言います。

「父上殿！ あいたたた！ いったい、何が起こっているのでもございませよ
う。私を捕まえてくせ者だなんて」

「お前は、誰だ？」

王様が言いました。

これは、どうしたことでしょう。愛する息子の姿がわからないだなんてこ
と、いったいぜんたい起こるものなのでしょうか？ それともニーダマは、ま
ちがったお城にでも来てしまったのでしょうか？ いいえ、そんなことはありませんよ
ね、ニーダマ自身は王様のことがわかるのだし、お城の様子を見たく
てそうです。だって、ここは自分の育ったお城にちがいないのですもの。

ニーダマは言います。

「私です、ニーダマではないですか。あなたの息子、第一王子のニーダマで
す。長い間お留守にしてみましたのは申し訳ありませんが、それには事情があ
るのです。たったひと月の間に愛する息子のことを忘れてしまうなんて、あ
まりではありませんか！」

その言葉に、王様は眉をぴくりと動かして答えました。

「私の大事なニーダマは、十年も前に北の湖で死んだのだ。それをなんだ！
お前のような盗人に、父だなどと呼ばれる筋合いはないわっ！ おい、兵隊が

しら、この男を城からつまみ出せ！」

兵隊がしらがニーダマの手をひねり上げたまま深く礼をし、後ずさりします。このままでは、お城から追放されてしまいそうです。ニーダマは、もう一度、大きな声で言いました。

「父上殿、いったい何が……もしや悪い魔法でもかけられてしまったのではありませぬか？ なぜ私かわからないのです。私は——」

でも、ニーダマはそれ以上話すことができませんでした。別の兵士に、さるぐつわをかまされてしまったのです。

「うぐぐ……うぐぐ……」

ニーダマは獣のようになり声を上げながら、必死で抵抗します。でも、何人も兵士に体を押さえつけられて、ただただ、ずるずるとお城の外へと引きずり出されて行くしかありませんでした。

〈つづく〉